

農山村親子の郷里への帰属意識に関する実証的研究

——長野県南佐久郡過疎三町村における事例分析——

中 澤 進之右

過疎地域の次代を担う青年層の定住化問題を考えるための基礎的資料の作成を前提に、長野県南佐久郡の過疎三町村（小梅町、南相木村、北相木村）を事例対象とし、中学・高校三年生と彼等の母親およびUターン青年を調査対象とした調査・分析を試みた。

研究目的は各々の調査対象者において郷里への帰属意識がどのような様相を示すのか、また、調査対象者の世代的意識的傾向を解明すること、過疎地域（調査対象地域）の担い手である青年層の定住化条件についてのヒントを得ようとしたものである。

本調査では特に、①過疎地域における転出予備軍としての中学・高校三年生の郷里への帰属意識および将来動向、②過疎地域における中学・高校三年生の母親の郷里への帰属意識および子供への帰属

意識、③Uターン青年の郷里への帰属意識および出郷から都市生活を経て現在に至るまでの意識変容などを描き出すことを主眼点としている。

調査結果をみると、転出予備軍としての中学・高校三年生は、高校を卒業すると都市へ転出することを当然とも受け止めており、周囲も彼等の転出には肯定的な傾向を示した。しかし、長子・跡取りにおいては郷里への帰属意識が高く、転出するにしても何年後にはUターンを予定しての転出である。それは、Uターン青年のUターン行動でも明らかであり、当初から内地留学的な意識で転出したUターン青年が多かった。

中学・高校三年生の母親では、特に過疎三町村出身、農業、団塊の世代以前において郷里への帰属意識の高さが顕著であり、最も頼りにしている子供としては長子を挙げている割合が高い。

中学・高校三年生の長子・跡取りおよびUターン青年においては、イエの存続と老親の扶養についての責任を特に強く感じており、それが彼等の郷里への帰属意識に影響を及ぼしているものと解される。また、母親についても長子・跡取りを頼りにする傾向が強いため、今後の調査対象地域は、イエの存続と老親の扶養について他の兄弟よりも責任感が強い傾向を示す長子・跡取りの動向が同地域の方向性を左右する重要なポイントとなってくることが考えられる。

調査対象地域の過疎三町村は、今日も刻一刻と過疎のテンポを速めつつあり、調査対象者においては過疎の深刻化に伴って意識面での後退も伺われる。このため、ヒト・モノ・カネ・情報を含めた地域再生・振興のための国家レベルでの早急な対応・対策が急務となっているのである。